

Awareness を高め社会適応障害の自己制御を試みた 1 例

はじめに

脳損傷者に対する包括的リハビリテーションの中で復学・複職を目標とする場合、認知機能の回復だけでなく患者の障害に対する気付き(awareness)を高め障害認識を深めていくことが重要と報告されている。今回、社会的行動障害から病棟で多々問題行動を認めた症例に作文を通して気付きを高め自己制御能力の獲得を目指したので報告する。

症例

20 代男性 単車で職場から帰宅途中に車と接触事故を起こし救急搬送。びまん性軸索損傷受傷。リハ目的で当院へ転院。

経過

入院当初からリハ場面で問題行動は出現しなかったが、病棟生活において自身の意に沿わない場面で問題行動が多発した。そこで問題行動に対し、注意+フィードバック+指導を徹底した。フィードバックでは自身の行動を客観的に文書にすることで気付きを高め、指導を徹底し再発防止に繋げた。また、高次脳機能訓練を集中的に実施することで機能の改善と病識の向上を促した。

考察

気付きは知的・体験的・予測的の 3 段階が報告されている(BruceCrosson1996)。自身の行動を書くということが作文産出過程モデル(Hayes&Flower1980)における、自己内対話の活性化を促進し基準と自己の実態のズレを意識させた。また、自己認識と前頭葉の関連も報告されており、前頭葉に対し集中的に認知課題を実施したことも自己認識を高めることに寄与したものと思われた。この 2 つの相乗効果により、作文を導入する前後で病棟での問題行動の発生数が顕著に減少させることに成功したことから、気付きを高めることで問題行動の抑制に一定の効果を示し自己制御能力を高めることが出来たと考える。しかし、今後の課題として本取組みは特に知的・体験的気付きに有効であった一方、予測的気付きには効果不十分であった点を検討していきたい。